

配的なスポーツ文化である近代スポーツへの「抵抗」と「オルタナティブ」いうスタンスを取っています。たとえば、「より速く、より高く、より遠くに」というフレーズに象徴される西欧の「業績達成型スポーツ(アチーブメントスポーツ)」というイデオロギーを強化し続けてきた近代スポーツに対して、ライフスタイルスポーツは抵抗し、それへのオルタナティブを提示しています。この点は、スケートボードなど、各ライフスタイルスポーツのお話をしながら、触れてみます。

さいごに、ウィリアムズが提示した文化の再生産プロセスを把握する 3 つの文化的な力は、文化を単に「支配と従属」のプロセスとして捉えるのではなく、文化創造の担い手として、人々の主体的な参加に開かれていることを示しています。この点は、ウィリアムズの文化の捉え方の特徴的な点です。

このように、ウィリアムズの文化を捉える独自の視点を紹介しながら、人々が多様な「生き方」を表現するプラットフォームとして「新しい」スポーツを創っていくプロセスを語ってみました。いかがだったでしょうか？ 理屈っぽい話は、しばらくお休みして、次回から数回にわたって、スケートボードについてお話しさせていただきます。お楽しみに！！

#### 参考文献

高山智樹, 2010, 『レイモンド・ウィリアムズ: 希望への手がかり』彩流社.

Turner, Graeme, 1996, *British Cultural Studies: An Introduction*, Routledge. (毛利嘉孝他訳, 1999, 『カルチュラルスタディーズ入門: 理論と英国での発展』作品社.)

Wheaton, Belinda, 2013, *The Cultural Politics of Lifestyle sports*, Routledge (市井吉興・松島剛史・杉浦愛監訳, 2019, 『サーフィン・スケートボード・パークール: ライフスタイルスポーツの文化と政治』ナカニシヤ出版).

Williams, Raymond, 1977, *Marxism and literature*, Oxford University Press.

#### ≪書評≫

ジェレミー・デシルヴァ著: 赤根洋子訳

### 『直立二足歩行の人類史ー人間を生き残らせた出来の悪い足ー』

2022年(文藝春秋・東京)

21世紀に入ってから人類発生史にかかわる新たな発見や古代人DNA解析の知見は、日本人類学の大御所・埴原和郎をして「驚くべき発見は今後も続々と報告されるに違いない。この本も、書き終わった段階ですぐに書き直し・・・ということにもなりかねないのである。

(『人類の進化史 20世紀の総括』、講談社・2004)」と言明させています。フランス人類学会の大御所・イヴ・コパンの、アフリカ大地溝帯の形成により山脈東側の熱帯雨林が消滅し

てサバンナ化が進み直立二足歩行が発生したとの“イーストサイドストーリー”（『ルーシーの膝 人類進化のシナリオ』、紀伊国屋書店・2002年）についても、アファール猿人（350万年前）以前の人類化石（420万年前のラミダス猿人やさらに古い650～700万年前とされる複数のもの）も発見されてきていることから、その他の可能性も指摘されてきています。

本書はこの「直立二足歩行」の発生にかかわる新たな理論を検討したものです。デシルヴァは、ダートマス大学准教授で、足関節を専門とする古人類学者（人類化石：骨の解析）で、アフリカでの複数の古人骨の発掘にも参加しています。

構成は、第1部：二足歩行の起源、第2部：人間の特徴、第3部：人生の歩み、結論：共感するサル、そして「解説」を分子古生物学の更科功（『絶滅の人類史 なぜ「私たち」が生き延びたのか』、NHK出版新書、2018年、の著者）が書いています。

特に第1部の第3章：「人類が直立したわけ」と二足歩行に関するその他の「なぜなぜ物語」で、さまざまな仮説を紹介しつつ、ヒトの系統が600万年前までにチンパンジーとボノボの系統と完全に分かれたことと、そのころのアフリカ大陸での初期ホミニンの生息環境（森の樹上か草原か）と行動や解剖学的な変化から「二足歩行の唯一の理由を探ることは無駄かもしれない」との見解で化石研究の重要性を指摘します。第4章：ルーシーの祖先、では、類人猿とヒトとの「ミッシングリング」というきわめて不正確な見解を否定しています。つまりチンパンジーの歩行形態である「ナックルウォーキング（拳をつけての四足歩行）」と「直立二足歩行」の「中間」は存在しないということです。そして有名なアウストラロピテクス・アファレンシスの「ルーシー」ではすでに現代人と同様の脊柱のS字カーブが存在し二足歩行を支えていたこと（腰椎はヒトの5個に対して6個）が明らかになりました。更に650万年前とされるオロリン・ツルゲネンシスの大腿骨や600万年前頃のアルディピテクス・カバダの下顎骨や足骨、そして700万年前とされるサハラントロプス・チャヘデンシスの頭蓋骨の発見などにより「ルーシーの祖先」に相当するホミニンが「直立二足歩行」を行っていた可能性を指摘します。

第5章：アルディとドナウ川の神、では2016年にドイツで発見された1100万年前とされる新種の類人猿「ダビウス」が二足歩行をしていた知見を紹介しています。つまり650万年前のヒトとチンパンジーが分岐したころの共通祖先もおそらく樹上や地上での「直立二足歩行」が可能であり、その後「チンパンジーが特殊化していった」との見解を示します。また、チンパンジーの親指以外の手指の骨が長いことや腕歩行を可能とする強力な上肢の力（人よりもはるかに強い）などの形質も、樹上生活に特殊化して進化してきた可能性を指摘します。これは、およそ700万年前から400万年前の間に、樹上生活に適応した類人猿が後退する森を追ってヨーロッパから出て、中央アフリカや東アフリカに点在する森林に散らばっていったことが背景にあり、このことは糖を脂肪に変換してエネルギー源を節約して利用するウリカーゼ遺伝子の解析結果（ヒトとチンパンジー・ゴリラなどが保有）からも示唆されています。

進化発生学の倉谷滋は、パターン A と B の形質があるときにその共通の中間的形質を持つパターン C は存在せず、共通の形質を持った原型パターン D からそれぞれが進化したとの「ボディプランのアルシャラクシス過程」の可能性を指摘（倉谷茂、『進化する形 進化発生学入門』、講談社現代新書、2019 年）しており、この「共通祖先」との類似性を示しているようにも思います。

第 2 部・第 7 章：1 マイル歩く方法は一つではない、では 2008 年にアフリカで発見された 200 万年前とされるアウストラロピテクス・セディバについて、踵、足首、足底の解剖学的特徴が類人猿に似ているものの膝の構造がそれを補って二足歩行を可能としていることを指摘しています。そしてセディバの歯間残存物の解析から、生活圏は草原ではなく 420 万年前のアルディピテクス・ラミダスと同様に森林であったことを指摘します。さらに 2009 年、ルーシー発掘現場の近くからルーシーの種とは異なるアウストラロピテクス・デイレメダの化石が発掘され、こちらもアルディピテクス・ラミダスに近い特徴をもっていたことから、200 万年の時代と場所を越えて「複数の歩き方で環境に適応していたホミニン」が複数存在したことが明らかになったとしています（頑丈型猿人：パラントロプス・ボイセイも 230 万年～140 万年前の期間生存していた）。

第 8 章・広がるホミニン、第 9 章・中つ国への移住、ではその後の 220 万年前のホミニン（注：いわゆるヒト属）について、アフリカでのホモ・エレクトスの少年骨格（ナリオコトメ・ボーイ）が発見された一方、ジョージアのドマニシ遺跡での 180 万年前の化石の発見などから、「ホモ・エレクトスはアフリカ大陸への出入りを頻繁に繰り返しながら、次第に行動範囲を広げ、直立二足歩行するホミニンが生息したことのない土地へ進出していった」ことについて解説しています。そして 2015 年に南アフリカで発見された「ホモ・ナレディ（脳容積 500cm<sup>3</sup>!）」が 26 万年前と推定されることから人類進化の時代的地域的な多様性の存在を指摘します。

第 3 部・第 10 章：最初の一步、第 11 章：出産と二足歩行、第 12 章：歩き方はみんな違う、第 13 章：運動が作り出す長寿物質、第 14 章：歩けば脳が動き出す、第 15 章：ダチョウの足と人工関節、と直立二足歩行の人類学的特性と意義を解説しています。

そして結論での「残酷さとやさしさと」で、ハーバード大学のランガムの「善と悪のパラドクス」を引用しながら「利他行動の証拠」としての「二足歩行と共感」について、“特別なサル”の共感し許容し協力する能力の存在を指摘しています。

ハーバード大学のデビット・ライクの『交雑する人類』（NHK 出版、2018 年）の原題は“WHO WE ARE AND HOW WE GOT HERE”です。最近の人類学的知見の急激な拡大は、私の知っていた知識がまさに“ガラガラと音を立てて崩れていく”というのが率直な感想です。

（山崎 健）